The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上田功先生のご退職によせて
Author(s)	早瀬, 尚子
Citation	大阪大学英米研究. 2018, 42, p. 29-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99416
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

上田功先生のご退職によせて

早瀬　尚子

本学年度（平成29年度）をもって、上田功先生が大阪大学を早期退職なさる。長年のご功績と本学へのご尽力、そして英語専攻へのご貢献に、深く感謝の意を表したい。

先生は、旧大阪外国語大学のご出身であるが、もともとは英語でなくアラビア語を専攻されていた、というご経歴がある。昭和53年3月にアラビア語学科を卒業の後、同年4月英語学科に学士入学し、大学院修士課程をおさめられた。その後、大阪学院大学、静岡大学を経て平成7年10月大阪外国語大学外国語学部助教授となられ、以降ずっと私たちの先輩および同僚として、長くつとめられてきた。英語のみならずアラビア語、そしてオランダ語やスペイン語、イタリア語など、様々な言語に興味を幅広く持たれるその姿は、古き良き時代における生粋の大阪外大の人物を体現しておられたと思う。

先生のご研究のスタイルはご自分の学問の国際的な発信を通じて常に up-to-date な交流を図ろうとする、意欲的かつ生産的なものである。先生は海外留学や在外研究のご経験も豊富で、英語専攻在学中には文部省学術交換派遣留学生としてウィスコンシン大学ミルウォーキー校に留学（昭和55年9月から昭和56年6月）され、また職を得てからもアメリカ合衆国連邦政府衛生研究所（NIH : National Institute of Health）基金によるプロジェクトメンバーとしてインディアナ大学言語学科で在外研究を行ったり、インディアナ大学音声言語医学科から招聘されたフルブライト交換研究員として共同研究に従事したりもされている。その留学・海外研究経験の豊富さは、特に海外留学を目指す者の多い英語専攻にあって、大変貴重な存在であり、数多くの学生が先生の薫陶およびアドバイスを受けて留学していった。その影響力

たるや、「先生に推薦状を書いてもらえれば、留学選抜もうまくいく」とジンクスのように学生の間でささやかれていることからもうかがい知れる。

先生は、ご専門である音韻論・音声学の中でも、取り組む人が多いとはいえない音韻獲得および障害という希有な分野において、国内はもとより国際的にも第一人者として高い評価を受けておられる。教鞭をとられるようになってからも毎年数回は必ず海外の学会に出席され、最新のご研究成果についての（招待）発表や座長などを続投されてきた。そして先生の周りの同僚や学生にも、「どんどん国際社会に発信して自分の研究の是非を問うようにしていくべきだ」と常日頃からはっぱをかけておられた。自ら実践しておられる先生からのことばは、浅学の身には耳に痛いもので、なかなかその域に達することのできないふがいなさに唇をかみながらも、少しでも自らを良い方向へ持って行こうと願うことが多かったことが思い出される。

先生は学究活動のみならず教育においてもその才能と存在感を遺憾なく発揮しておられた。授業ではいつしか学生から「上様」と呼ばれて恐れられる名物教師であったし、レベルに達しない学生には容赦なく厳しい成績をつけた。それは、大阪外国語大学、また統合後は大阪大学の外国語学部卒業という肩書きにふさわしい英語力を保証するべきであるという強い信念があり、そのために敢えて心を鬼にして厳しく線引きをしておられたからである。ただいたずらに厳しいだけでなく、裏にそのような配慮、願いがあることは学生たち自身にも十分に伝わっており理解されていて、謝恩会の折などで、「先生の叱咤激励に襟を正して勉学への態度を改めた」と告白する者が何人もいた。また、入試関連ではその作問選定のセンスの良さに定評があったし、現在のセンター入試でリスニングが導入された初めの数年間に問題検討委員として大活躍され、その後の布石を作られたこともある。

このように先生は、研究者・教育者としても大変すばらしいご業績の持ち主である。そして、それに加えて大変に親しみやすい方であられ、社交的で気配りに長けた方でもある。学会でも研究会でも、分野違いであっても、上田先生は知られた有名人であった。それは、初対面であっても年上である先

生の方から気さくに話しかけてくださり、また配慮くださるということに現れていると思う。私事ではあるが、初めて先生とお話したのは、大阪外国語大学の講師ポストに応募していた折り、なかなか来ない審査結果に半ばあきらめていた中、その経過報告をしにきてくださった時であった。私は大阪大学文学部の助手をしており、先生は言文の非常勤の授業を終えて、ふらっと助手室を訪ねてこられた。外大に来る気がまだあるか（もう他にポストが決まってしまったりしていないか）と尋ねてこられた先生は、私にとってまさに救世主のようであった。以来、着任してからは折に触れて授業運営やテキスト選定、はたまた教務関係や非常勤・集中の先生の推薦などの相談に乗ってくださった。1年間育児休暇を取りたいと申し出たときも、その間の非常勤の手当やゼミの対応について、ご自分の交友関係の広さを駆使して、先回りしていろいろと配慮くださった。育休を取得するのにいろいろと苦労したという周囲の話を聞くにつけ、自分はたいそう恵まれていたのだと、先生のお人柄と懐の深さに改めて感謝の気持ちでいっぱいである。

大阪外大と大阪大学との統合に際し、上田先生は杉本孝司先生（2014年に定年退職された）と私と3人で英語専攻から言語文化専攻に移籍することとなった。慣れない新しい部局でも先生は積極的にその社交性と献身性を発揮され、またたく間に言文専攻でも一目置かれて信頼される人材となられた。医学部の小児発達講座の兼任にもなられて多忙を極める中、未来戦略機構のリーディング大学院「超域イノベーション・プログラム」における言語関係の責任者となり、大阪大学の大学院生対象の英語教育の開発に努められ、言文専攻の評価を高めることとなった。また同時に、箕面担当の教員としての立場も引き続きこれまでと変わらず大切に勤められ、医学部英語に関わるアドバイス等を行うなど阪大における外国語学部の貢献性も高めておられた。統合を経て箕面と豊中の両方を知る貴重な人物として、二つの潤滑油的な働きを十二分にしてこられたと言えるだろう。

このように大きな存在であった上田先生がおられなくなることは、大変な損失であり、寂しいことである。その抜けた穴はとてつもなく大きく、埋め

ようもないもので、残される者としてはただただため息をつくばかりである。しかし幸いにして、招聘教員としてあと何年かだけは残っていただけるという朗報もあり、正直なところ、まだまだ折に触れて頼りにしてしまいそうである。とはいえ、甘えてばかりもおられない。これからも私どもを、ほどよい距離を置いたところから見守り続けていただければ嬉しい。4月以降立場や身分こそ変わっても、今後とも変わらず私どもとのつきあいを続けさせていただければ、と、切に願っている。

上田先生、長らくお疲れ様でした。そしてこれからもどうぞよろしくお願いいたします。

平成三十年の成人の日に
早瀬　尚子